

立川集落「教科書」できた

大豊町 移住ミスマッチ防止へ

県大生協力

【嶺北】大豊町の立川集落へ移住を考えている人に地域の実情を伝え、移住後のミスマッチを防ごうとこのほど、住民グループが「集落の教科書」を刊行した。高知県立大学の学生団体が住民への聞き取り調査や原稿執筆で協力。住民は「いいことも不便なことも、ありのまま記した。地域の実情を知った上で来てほしい」と話している。

集落の教科書は京都府南丹市のNPO法人が2015年に監修した一冊が始まりで、全国各地で同様の冊子が発行されている。県内では立川集落が初めてという。

立川地区には59世帯75人が住み、高齢化率は85%を超える（4月時点）。教科書は同地区活性化推進委員会の吉川定雄会長（75）が発案

し、町の補助金15万円を活用。町集落支援員の蓬台祐希さん（27）が写真撮影と編集を担い、A4判64ページにまとめた。

地区内の5集落の概要やごみの出し方などの基本情報をはじめ、夜に買い物に行こうとしてもスーパーが閉まっている▽草刈りなどの共同作業が定期的にある▽テレビを見るためには電

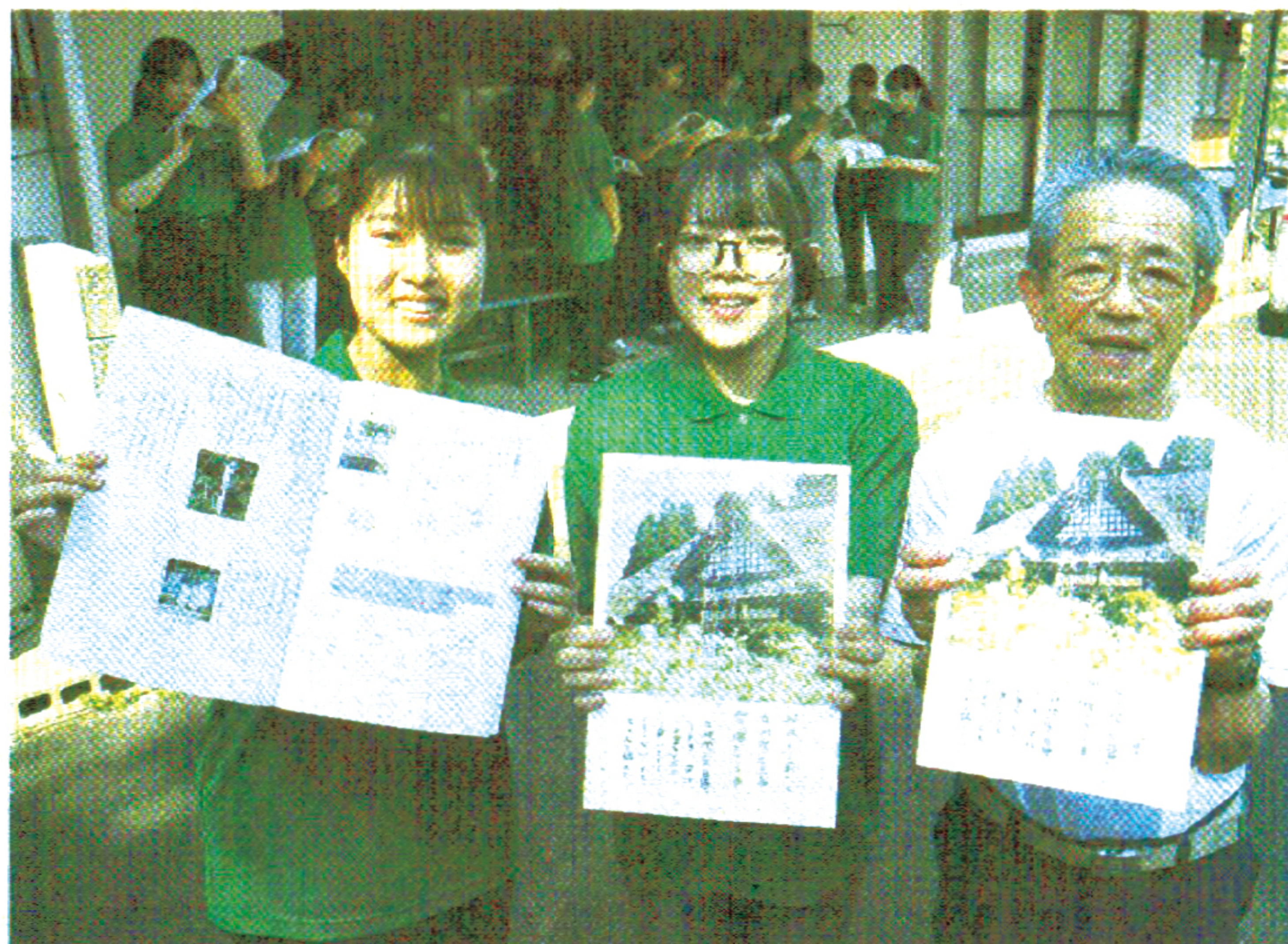
波塔の修繕費（年2500円）が必要といった地域の実情を掲載。

このほか、同じ名字の人が多いため「屋号」も一緒に覚えることをアドバイスし、屋号のマップも収録。通信キャリア別に携帯電話の電波がつかない場所、道に出てくる動物とよく見かける虫と遭遇した時の対処法も盛り込んだ。近くに相談できる人を見つけておけば困ったときに助けてくれる」と地方暮らしの「こつ」も記している。

300部作り、移住を検討する人が地区に来たときに手渡す。地元の方言「立川弁」の一覧と用語解説の付録もある。

記載事項の多くは県立大学の学生団体「おおとよ探検隊」が聞き取った。いずれも徳島出身の1年生、新発舞さん（19）と市山みづきさん（18）は「地区の方が気さくでたくさん話してくれるので、逆にまとめるのが大変だった。移住の『道しるべ』にしてほしい」と力を込めた。

吉川会長は「自分たちが気づかない良さも外からの目でまとめてくれた。立川の実態をきちんと知ってもらうことが、長く住んでもらうための第一歩になる」と話している。（川嶋幹鷹）



「集落の教科書」を発行した立川地区活性化推進委員会会長の吉川定雄さん＝右。高知県立大の新発舞さん＝中央＝と市山みづきさんが編集に協力した（大豊町立川上名）